民俗信仰與隨筆合集 II

奥野信太郎隨想全集五

江苏工业学院图书馆
藏书章

知友回憶

編集委員
佐藤朔
戸板康二
村松暎

福武書店

奥野信太郎随想全集（全六巻）
別巻一
5　知友回憶
定価二八〇〇円
昭和五十九年九月十五日初版印刷
昭和五十九年九月二十五日初版発行
著者　奥野信太郎
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社　福武書店
〒一〇二　東京都千代田区九段南二―三―二八
電話　東京(〇三)二三〇―二一三一(代)
振替口座　東京二―八七三七二
印刷＝精興社／製本＝小泉製本
本文用紙＝三菱製紙

©1984

シリーズコード　ISBN 4-8288-1125-7　C 0395
第5巻コード　ISBN 4-8288-1109-5　C 0395　¥2800E
NDC 914 196 288 p

知友回憶

奥野信太郎随想全集 5

目次

I

秋骨先生の訃 …… 9
画鶻山房燭影暗し …… 16
露伴翁と漢文学 …… 20
与謝野両先生 …… 25
孤蝶追慕 …… 32
回想の三田 …… 37
俗情連句会 …… 55
気がかりな事一つ …… 58

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鷗外先生と祖父……62
長安城の月……67
春夫文学……74
横手の雨……78
反俗を貫く最後の文人……87
よき教授永井荷風……109
与謝野・折口両先生……120
梅原画伯訪問記……123
酒友列伝……134
酔虎伝……145
清楚典雅な小泉先生……151
親父が娘を……156
忘れがたい人……159

みなのかの日に……162
明治書生の型……165
大正末期（一）……169
大正末期（二）……173

II

殷汝耕と語る……179
周作人と銭稲孫……194
陸素娟のこと……213
冰心型と白薇型……219
富連成を惜しむ……231
詩人黄瀛のこと……237
K家の人々……256

陶晶孫回憶……263
馬連良の訃……266
巴金と語る……269
梅蘭芳と京劇……273
解説　戸板康二……277
出典一覧……282

装幀　井上太郎

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

秋骨先生の訃

七月九日の夜、わたくしたちは四五人、渋谷のキリンビールに集まって、それから宇田川町の西脇順三郎氏宅に赴いたのでした。それは戸川先生の御症状が、あまり捗々しくないから、この際少し大がかりに先生を御慰問申し上げるには、どんな方法が一番よかろうというような相談をするためでした。実はそんな気もちは前々から、みんながもってはいたのでしたが、大体こんなことを、あまり好まれない先生の御性格を推して、いつもわれわれは単純な、通り一遍の御見舞にばかりうち過ぎていました。それでともかく、こうして一同が会して、よりよき相談をするというようなことは、御病臥以来はじめてのことだったのです。西脇氏を中心に、いろいろ談合した結果、それではこんなふうに着手しようと一先ず話がまとまって、その晩は散会しました。帰りみちに、鷲巣尚二君を除いた一同は円山のおしげさんのところで、冷たいビールを飲むことにしました。

おしげさんの家の二階の通りに向った六畳で、とにかく腰をおちつけたのでした。夜も

更けたので、蜆汁と瓜もみと焼海苔と、そんなところで大分ビールの杯をかさねていました。その時です。鷲巣君が、戸川先生御逝去の電報がきたといって、周章て馳けつけてきてくれたのは。われわれは脳天から足の先までを、なにか電撃のようなものが走るのを感じたのです。つい先刻、われわれが相談していたとき、あのときはもう、先生はすでに御逝去になっていたのでした。ひょっとしたらまだ病院かもしれないというので、大急ぎで信濃町までとんでいってみました。イ号の御病室には、《戸川明三　面会謝絶》と記した札がかけられていましたが、もう室のなかはすっかりとりかたづけられていました。睡そうな顔をした若い看護婦が一人出てきて、もう御自宅におひきとりになりましたと教えてくれたので、またすぐ一同は、荻窪まで急いだのです。

御宅では、願泉寺から迎えられた坊さんが、しめやかに枕経を上げている最中でした。なるほど先生はお亡くなりになったのでした。われわれも合掌して静かに御焼香しました。しかしこのような現実に面接しながらも、お亡くなりになったことが、どうしても事実として受けとりかねるのでした。われわれが西脇さんのところに集って話あっていた頃、先生はもうこの世におられなかったのだということが、どうしても不思議なのです。それにお亡くなりになる間近かまで、もうすぐ癒ると信じきっておられた先生の御言葉など思い出すと、どうしても御逝去になったということが、すらりと胸にはいってきません。そう

いう気もちで胸を塞がれながら、夜半われわれは帰途につきました。生垣つづきの荻窪の通りは、青葉の吐く息が、蒸し蒸しと強く匂う、暑くるしい晩でした。第二ピストル強盗が出たという非常警戒のために、われわれの乗ったタキシーは、ほとんど数町おきに止められたのです。

自然院英明秋骨居士、こういう戒名でした。たしかに先生はお亡くなりになった、それにちがいはない、それなのにそれがどうもとっくりとのみこめない。それこそ思出話の数数なら、あり余るくらいあるはずのわたくしに、先生の思出話を語ることが、どうしてもできないのです。あと三年五年経過して、秋骨先生が仏になられたという感じが、しっくりしてこない限り、先生について、こんなことがあった、あんな話もあったと、書いたり語ったりする気になれないのです。とはいえ、先生がお亡くなりになったことが、厳とした事実であってみれば、それこそ泣いても泣いてもうとりかえしのつかない、真暗な大穴がぽっかりと足もとにあいて、いきなりそのなかに、あてどなく落ちこんでゆくわれわれなのでした。なにが寂しいといって、常に尊敬の念を持しつつ、それでいて無遠慮に訴え、駄々を捏ね、教えられてきた大長老を失うくらい、大なるものはありません。われわれはめいめい、先生の前では、自分たちのあらゆる弱味をさらけ出してきました。愛憎、貧乏、恋愛、すべてのことに関して。

しかしその都度先生は、どんな迂愚をひろげて御覧に入れても、決して小馬鹿にもしなければ、また面倒くさがりもしないで、一々とりあげて下さるのでした。御自身は、聡明な正しい、そしてものの節度を、この上なく心得た方でしたが、それと同時に世俗の煩悩の魅力をも、よく理解していただけるのが、われわれにはなによりでした。少くともわたくしは、煩悩の魅力についてばかり先生に愁訴し、いつも御厄介をかけ通しだったのです。

今年の二月の幾日かでした。われわれの小さなグループで、曲りなりにも古稀の御祝をしました。喜多の宗家の方でも、この秋には盛大に、先生の古稀祝いの催しをされる企てがあるとかで、厨川文夫、鷲巣尚二君とともに、わたくしもこちらの側の委員に選ばれて立教の門馬さんと御話あいしたことなどがありました。先生もこればかりは非常に喜び、かつ楽しみにしておられたのです。それはまあそれとして、早いところ小規模な、というよりもっと気のおけない、出たらめな会もあったとて、一向差支えなかろうというので、さっそくおしげさんの家の二階で、一夕催す段どりになったのです。集るもの十名ばかりでした。

おしげさんというのは、渋谷円山にある、駒形屋というおでんやの娘です。このおでんやは、ある雨の日のつれづれに、ふと酒をのみたくなったわれわれ悪童どもが、偶然発見したのが縁となって、ついに先生をも行きつけにしてしまった店なのです。思いきり汚な

い小さな店ですが、そこの家の、無粋なアルマイトの鍋に入れて出す湯豆腐とともに、娘のおしげさんも、先生にはいつも親しくしていただいたのでした。その晩はわれわれも十分に酔いました。絶対に色紙短冊の類に揮毫をされない先生が、おしげさんの請を容れて、めずらしくも筆を染められたのも、その晩のことでした。これは大した出来事だといってわれわれは傍から囃したてたのです。

先生はかねてから一度御面識のある知堂周作人氏に推服しておられました。北京留学当時、わたくしは知堂先生に秋骨先生のことを物語る機会があったことを、今でも大きな幸としています。秋骨先生に『凡人崇拝』という随筆があるが、先生御自身はすばらしい非凡人だということを知堂先生はわたくしに語られたのです。帰朝後、さっそくそのことを先生に御伝え致しました。その後先生は、松枝茂夫氏の飜訳によって知堂先生の作品を読まれ、殊に異邦人の身にして、たとえば永井荷風氏の文学のもち味などに、透徹した理解を示されている知堂先生の冴えた頭脳を推賞しておられました。海を隔てて、二人のすぐれたエセイストが、相許した心知であったことは、実に愉快この上なきことといわねばなりません。更に先生が遥々中国までおでかけになって、もう一度知堂先生と御面会の機会があったなら、どんなにか双方御嬉しいことでしたろうに、今では思っても及ばないことになってしまいました。

思っても及ばないといえば、大体先生はやりかけの御為事をまず完了されたのはなによりでしたが、御計画に属するものは、なお二三御腹案としてのこっていたようです。

第一は、ディキンズの『ピクウィック・ペーパーズ』の飜訳でした。これは是非近々のうちに着手したいといっておられました。そして最近、ほんの少しばかり自分の英語の力が増進したように思えるのが心強いと、例によって遠慮深くいわれいわれするので、若いものたちは大そう恐縮しておりました。

も一つの御腹案は、「英文学に於けるユートピア思想の展開」に関する浩瀚な研究論文を書き上げられることでした。これは相当に材料も集積され、かなりノートもたまっていたはずであり、完成の暁には、学位論文としてもいいという御考えのようでした。もっとも学位論文というのは、われわれが勝手にそう極めこんでいたので、戸川博士というのは口調がいいからと申し上げたときに、先生は笑いながら、それもそうだとおっしゃったそのことをとり上げて、その御研究と学位とを結びつけて考えているだけの話で、先生の御真意のほどは解りませんが、この御為事が御計画中にあったことだけはたしかです。

そのほか、漠然と、折があったらやってみたいと思っておられた程度の御腹案中には、ピープスの日記の飜訳や、英文学一千年史（これは文学史を書くときには、この題をつけるつもりだといわれたことがあるので）などが存していたようですが、近い将来に、是非ともやりとげた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com